

「100,000年後の安全」というドキュメンタリー映画を観ました。フィンランドでは、稼働している4基の原発の高レベル放射性廃棄物最終処分場を、自然災害や戦争などの影響を受けず、人間の管理に依存しない形で保管できる場所として、18億年にわたって安定しているフィンランドの花崗岩地層の地下500mに、2004年から建設を開始し、2100年代までに全ての高レベル放射性廃棄物を格納し2度と開けられないように封鎖することになっています。放射性廃棄物を無害化する方法は現代の科学では確立されておらず、生物にとって影響のないレベルになる（自然減衰）までに10万年の歳月を要すると言われていま

す。「格納されている放射性物質の危険性を10万年後の人類に警告する手段（現代の言語や記号では困難。ピラミッドでさえ五千年前の建造物です）はあるのか？」が真剣に議論されつつ、建設は継続されています。技術開発に取り組む者の一人として、考えさせられる話でした。

今月号は、「沿線環境」と題した特集をお届けしました。沿線環境は10万年先ではなく、素早く対応していかなければなりません。その技術の一端をご理解頂けたでしょうか。なお、次号は「信頼性評価」について特集の予定です。ご期待下さい。(Y.S.)